

# フィリピン国人民の歴史における看護教育の位置づけ

呉大学看護学部

佐々木 秀 美

**論文要旨** フィリピン国について歴史的に若干の理解を深めつつ、フィリピン国における看護教育の歴史について検証し、若干の考察を加えた。スペイン国植民地としての永い年限、アメリカの植民地時代、そして日本軍の侵攻と苦しい年月を過ごしたフィリピン国は独立して間がなく、世界一貧しい国と評される。同国の看護教育は植民地政策の中でアメリカ看護師の専門職志向が反映され、発展し、その植民地政策の延長線上にフィリピン看護婦の国際的移動があった。特にアメリカ政府とフィリピン政府はEVP協約を結び、積極的にフィリピン看護婦を受け入れた。アメリカ他世界には慢性的な看護婦不足があり、その解消が主な施策であったが、フィリピン政府においては看護婦たちが海外で働くことによる外貨獲得という施策があった。ゆえにEVP協約によるフィリピン看護婦の国際的移動両国の目的において相違はあったが利害は一致していた。今後、わが国が海外の看護専門職を受け入れるとしたら彼女たち自身の専門職としての自己実現も含め、教育面での支援体制が重要である。

キーワード：フィリピン国人民の歴史、看護教育の歴史、看護専門職、交換看護プログラム（EVP）

## ■ はじめに

フィリピン共和国（The Republic of the Philippines 以降フィリピンとする）はその国名のSが示すように数多くの島々からなる国であり、美しい景色で観光客の心を魅了する。触れあった人々も実に親しみやすい。しかしながら、日本との第二次世界大戦での熾烈な戦いは歴史に残る。同国にはスペインにおける植民地時代からの脱却、あるいは第二次世界大戦における日本との戦いの爪あとを残しつつ独立国家としての象徴としてメモリアル公園が残されており、“世界に平和”の日本語の文字が真新しく掲げられていた。町にはジープニー（Jeepney）と呼ばれる乗り合いバスが自由無尽にお客を拾っている。ジープニーとは第二次世界大戦後にアメリカが置き去りにした軍用ジープをフィリピン人が解体し、小型の乗り合いバスにしたものである。フィリピン庶民の足であるその乗り物は持ち主の個性が生かされ、飾り

や鏡が車の台に取り付けられている。初めて見る者には奇異に映るが、乗り手の好みを反映している点では日本でも類似の光景を目にする。戦後、60年以上が経過しているが、その爪あとをこのジープニーに見る思いである。車外に見る首都マニラの町並みは一見、日本の新宿を彷彿させるような高層ビル群、大型のショッピングモールや高級ホテル街であるが、じきに貧しい暮らしを連想させる町並みが眼前に広がる。その光景はマザー・テレサ<sup>1)</sup>が「貧困の問題を知的に知ろうというのではそれを理解することはできません。読書によってでなくスラムの町を歩いたり、貧困の持つ悪い面と良い面について感心したり、残念に思ったりすることによって理解していくのです。」<sup>2)</sup>と述べたがごとく、同国には一朝一夕には理解できない様々な問題が横たわっていることが考えられる。

日比友好50周年に当たる2006年、呉大学看護学部とフィリピンのパーペチュアル・ヘルプ大学と

の協定が成立し、同大学に語学研修の一環として学生を派遣することができた。そのことが契機となり、同国の歴史とそこで発達した看護教育の変遷過程に強い関心を持つにいたった。フィリピン国に関する歴史については『貧困の民族史』<sup>3)</sup>『フィリピンの歴史・文化・社会』<sup>4)</sup>『ポスト・エドサ期のフィリピン』<sup>5)</sup>に多少なりとも見ることができ、同国の発展経緯について理解を広げることができる。フィリピンにおける看護の歴史については古くはメアリー・アデレード・ナッティング<sup>6)</sup>とラビニア・ロイド・ドック<sup>7)</sup>共著の『看護の歴史』<sup>8)</sup>で示された看護教育の開始に関する研究と、ドックらの記述を参考にしながら、独自の調査結果をまとめたチョイ著『フィリピン人とアメリカ人の歴史における看護ケアと移住の統治』<sup>9)</sup>がある。ドックらの研究は主としてアメリカが、フィリピンを植民地化した時代における専門職業人としてのフィリピン看護婦の育成と公衆衛生事業について論じたものである。レイニンガー<sup>10)</sup>は著作『レイニンガー看護論—文化ケアの多様性と普遍性』の中でフィリピン系アメリカ人の価値観についての調査報告に若干の紙面をさいている。わが国では外地に従軍した看護婦によって書かれた個人誌<sup>11)12)13)14)</sup>他多数残されているが、フィリピンにおける看護教育に関する研究報告は見当たらない。佐々木秀美は著『歴史に見るわが国の看護教育—その光と影—』<sup>15)</sup>で、わが国の看護教育の歴史の変遷についてまとめた段階でドックが述べたがごとく、儒教主義国家であった日本の男尊女卑的な傾向は文化的・思想的背景として実際、伝統的な社会規範として歴然としており、それが看護教育に影響を与えてきたことは否めないし、看護教育の阻害因子の一つであったことも否めない。ゆえに日本・フィリピン両国ともにジェンダー的という側面では類似性はあるかも知れないが、しかし、看護教育の開始から違った側面を有していたように考えられる。

チョイの著作は、現在までのアメリカ社会における現象、すなわち、1966年から1985年の間に少なくとも2万5,000人ものフィリピンの看護師がアメリカに移住したという事実について、なぜ、20世紀後期に発展途上であるフィリピンが専門職看護師をアメリカのような「先進国」に送り込むことになったのか？という問いから始まった研究成果報告である。昨今、日本でもフィリピンからの看護師受け入れが議論されている。その議論か

らは日本の看護師不足解消の意図が考えられる。ゆえにチョイ自身の問いは私自身の問いであり、その解決の糸口を見出すことは今後の日比の看護教育連携には欠かせない。

そこで、本論ではフィリピンの歴史を限られた文献を手がかりに概観しつつ、フィリピンの看護教育の歴史について検証し、締結したパーペチュアルヘルプ大学の位置づけなども視野に入れ、今後の日比における看護教育の連携に関する示唆を得ることを目的とする。

## ■ フィリピン人民の歴史

フィリピンには外国人が到来する前の資料がほとんど残っていないとされる。青山和佳著『貧困の民族史』<sup>16)</sup>によれば1450年頃にスルー国王(sulu sultanate)による統治が現在のフィリピン諸島南部、スルー諸島を中心になされたとされる。この頃は主としてイスラム教であり、古くから真珠の名産地として知られる。今日でもマニラ市内のショップではイスラムの衣装を着た婦人たちが真珠を売っている光景を見る。

フェルディナンド・マゼラン<sup>17)</sup>が世界一周という偉業を成し遂げたのは、日本人の私たちも知らない者はないほど世界史に登場する歴史的事実である。これは若い者たちの冒険心をそそるには十分であるがしかし、その背後に恐ろしいほどの残虐な行為が隠されていたこともまた、事実である。合併に合併を繰り返し巨大王国になったスペインは「西ヨーロッパの大経済レースではしんがり」<sup>18)</sup>であり、「征服と収獲を経済活動の最大の目標」<sup>19)</sup>であった。その後、スペインは南アメリカのほとんどを植民地化した。1521年にはマゼランがセブ島に来航、スペイン占領時代が始まる。フィリピンという国名の由来も当時のスペイン国王、フェリペ2世<sup>20)</sup>に因んで付けられたという。

1543年、わが国にポルトガル人が来航、鉄砲が伝来され、1549年にはフランシスコ・ザビエルがキリスト教を伝えた。時代は織田信長の治世である。以降、九州地区を中心にキリスト教が広まった。スペインからもキリスト教布教のために多くの宣教師が来日、1584年には九州の大名が少年使節団をスペインに派遣した。織田信長は仏教を嫌い、キリスト教を擁護したが、豊臣秀吉、徳川家康と将軍が代わるに連れキリスト教信者弾圧が繰り返される。キリスト教信者として高名な高山

右近<sup>21)</sup>は罪に問われ、現在、フィリピンの首都であるマニラに流刑となった人物である。彼を描いた『高山右近』<sup>22)</sup>には小説であるがゆえに多少の脚色があるにしても、キリスト経宣教師たちの人道主義的な行いや施療の状態を見ることができる。しかしながら、キリスト教国であるスペイン宣教師達の日本における慈善的な活動を通して、キリスト教の教えに目覚め、人としての行き方に共鳴し、その生き方を自己の理想像とし、その信仰のために死をも恐れなかった右近がその最後の地、スペイン植民地下のマニラで圧制に苦しむ国民をどのように見たのであろう。右近が流刑された頃のマニラには既に日本人も住んでいたとされる。

『フィリピンの歴史・文化・社会』の著者、ディベット・J・スタインバーグ<sup>23)</sup>は「スペイン人支配者は、フィリピンの歴史を歪め、外国人の役割を強調し、原住民の存在を無視した。」<sup>24)</sup>とその著作の冒頭に記し、スペイン政府は中国人にキリスト教を布教する、あるいは中国との貿易に必要な拠点としてフィリピンを征服したと述べている。同国では教会によって整備されたガレオン船による貿易が250年間も続いたとされるが、この貿易はマニラ在住のスペイン人の生活の糧であり、フィリピンの発展には貢献しなかった。

1762年にイギリスがマニラを占領した。イギリスに対抗してフランスがスペインと同盟を結んだ。中国人はスペイン人に抑圧されていたためにイギリスを支持した。1764年にはイギリスはすぐに全フィリピン諸島をスペインに返還した。ヨーロッパにおける7年戦争<sup>25)</sup>、アメリカ独立戦争、フランス革命、ナポレオンによるヨーロッパ征服の試みはヨーロッパとその植民地に影響を与えた。ラテンアメリカで起きた独立運動はスペイン支配に終止符を打ち、これがフィリピンにも影響を及ぼした。

フィリピンに独立の気運をもたらし、今でも英雄と称されるホセ・リサル<sup>26)</sup>は少年の頃から抱いていた「フィリピン人、フィリピン文化は果たして劣等か」<sup>27)</sup>という問いを“ノリ・メン・タンヘル”という小説に込めて書いた。この小説がフィリピン国内で話題を呼び当局の目に留まる。危険思想であると考えられたリサルは国外追放になった。1888年に彼は一時日本にも身を寄せている<sup>28)</sup>。その後、リサルは一時帰国を許されたが、再度、流刑された。流刑地ではわずかな診療

経験を持つに至ったが、彼の医術の技を国民に施すまでもなく再び拘束され、フィリピン民衆に対して独立を促したとしてフエルサ・デ・サンディアゴ刑務所に拘置された。軍法介護の結果、1896年死刑が執行された。彼が死刑執行前に書いたとされる“Mi Ultimo Adios—別れのあいさつ”は不朽の名作といわれた。

「さよなら、愛する祖国、

なつかしい太陽の地よ、東洋の真珠、

今はなきわが楽園よ、喜んで君に捧げよう、

貧しく萎びたこの命を。

いや、たとえ輝きにみちていて、

いっそう清らかで、

花咲くような私であったとしても、

やはり、君のために、この命を捧げよう。

君のしあわせのために、この身を捧げよう。」<sup>29)</sup>

彼の死後、フィリピン国内でも独立の気運が高まった。イルストラド (Ilustrados 啓蒙を受けた人) と呼ばれる外国で教育を受け、力を付けた人物たちがアメリカと協力関係を結び、独立の動きを見せたが、現実的にはアメリカの支配を許してしまう。1898年に起きた米西戦争<sup>30)</sup>でアメリカに負けたスペインは20,000ドルでフィリピンをアメリカに売り渡し、その後はアメリカがフィリピンを占領した<sup>31)</sup>。アメリカのウィリアム・マッキンリー<sup>32)</sup>大統領は、フィリピンの主権はアメリカにあると宣言した。この時点で実質的にフィリピンはアメリカの植民地になった。1899年にフィリピンの独立を宣言し、初代大統領に就任したのはエミリオ・アギナルド<sup>33)</sup>である。同年、米比戦争が勃発した。革命軍総司令官として更なる独立戦争を開始したのはアミルテオ・リカルテ<sup>34)</sup>であった。1900年にアーサー・マッカーサー<sup>35)</sup>がフィリピン派遣軍指揮官として着任した。テオドール・ルーズベルト<sup>36)</sup>大統領は植民地政策を取りながら“フィリピン=コモンウェルス”を樹立させ、自主統治へと移行させようとした。

1935年、次の大統領に就任したのはマニユエル・ケソン<sup>37)</sup>である。彼は1916年に将来の独立を盛り込んだジョーンズ法 (フィリピン自治法) の成立に尽力するなど、強大な指導力を発揮して民主主義的政策を推し進めた。彼らを脅かしたのは第二次世界大戦であった。1942年に日本が侵攻してフィリピンを占領した後、ケソンはアメリカに亡命し、亡命政府を樹立した。この亡命政府樹立時代副大統領としてケソンを支えたセルヒオ・



オスメニャ<sup>38)</sup>は、ケソン死亡後の1944年に大統領に昇格した。

1942年、日本軍がマニラに入った当時のアメリカ軍の指揮官はダグラス・マッカーサー<sup>39)</sup>であった。フィリピン人は目前に迫った独立の機が熟したと考え、日本軍に抵抗した<sup>40)</sup>。戦時中、日本軍によって強要されたタガログ語と土地所有の慣習の賛美は、フィリピン人の間に新しいプライドを生んだ<sup>41)</sup>。彼らの植民地主義によって植えつけられた価値体系が揺らぎ始めた。日本軍制下の第二次共和国大統領はホセ・ラウエル<sup>42)</sup>である。ラウエルは20世紀で最も重要な真の指導者の一人とされる<sup>43)</sup>。後のフェルディナンド・マルコス<sup>44)</sup>に影響を与えたとされるラウエルは、戦前の日本の強固な権威主義体制にフィリピン社会を再構築する方法を見出した<sup>45)</sup>。彼は明治天皇下で行われた日本の教育政策の成功に魅了されていたのである。スタインバーグは「日本軍は多くのフィリピン人に対して、残忍で無神経な態度をとった。その一方で、日本占領は西欧の帝国主義的なシンボルの形跡を消し、地域の習慣を尊重して実践し、タガログ語（母国語）を使用し、英語でなくその地方の方言で雑誌や新聞、そして文書を作成して、フィリピン人の西洋モデルへの依存を改めさせた。」<sup>46)</sup>と結論づける。この日本軍の行為の背景にはリサルに影響を受けた人物の存在があったのではないかと考えられる。現在、かつてスペインやアメリカがフィリピンを統治していた頃に軍事的に最も重要な役割を果たしていた場所であるイントラロムス<sup>47)</sup>がある。イントラロムスの北側の一角にサンチャゴ要塞があり、軍事的に最も重要な役割を果たしていた場所である。城門内にはホセ・リサル記念館があり、リサルが使っていた机や服、当時描かれた絵画などが展示されている。

フィリピンはアメリカとの協力関係で日本軍に勝利した。彼らは戦後復興のためにアメリカからの多大な支援を期待したが、マッカーサーは戦後、フィリピンに残らず日本に降り立ったのである。アメリカに裏切られた形になったフィリピンは今、日本との戦いの傷跡を残しながらも日本やアメリカの戦後補償あるいは経済支援によって立ち直りつつある。が、しかし貧困の問題が引き起こす様々な問題を抱える国家なのである。

終戦後の1946年、マヌエル・ロハス<sup>48)</sup>が独立国家としてのフィリピン共和国初代大統領となっ

た。4億ドル以上の復興支援をアメリカ政府から得たフィリピン政府は手探りで自らの方向性を模索するようになった。1947年、エルピディオ・キリノ<sup>49)</sup>が次の大統領になった。キリノ政権は戦後復興、経済成長、アメリカ政府からの経済援助の拡大を目指したが、共産ゲリラによる脅威の他に広くはびこった汚職に悩まされた。1950年度までには国家は財政的・道徳的・政治的・軍事的危機に陥っていた。次の大統領であるラモン・マグサイサイ<sup>50)</sup>はフィリピンの歴史を変えるべき人物であったが、1957年、飛行機事故で死亡した。そのため、1957年にはカルロス・ガルシア<sup>51)</sup>が大統領に就任、1961年にアメリカの後押しでディオスダド・マカパガル<sup>52)</sup>が大統領になった。両者には自らの力で階層や時代が課す制限を超越する力はなかった<sup>53)</sup>。

1965年、フェルディナンド・マルコスが大統領に就任した。最初、彼は希望と進歩のシンボルであったが、後に全能の独裁者として、そして最後に汚職と腐敗の世界的シンボルとして国民を20年間に渡って支配した<sup>54)</sup>。マルコス反対派のベニグノ・アキノ<sup>55)</sup>はマルコスが最も恐れた人物であった。フィリピン帰国直後の空港におけるアキノの死亡は全世界が見た衝撃の事実であろう。1986年、マルコス一族がハワイに逃亡、コラソン・アキノ<sup>56)</sup>が大統領に就任した。アキノ政権は善良な政府を建設して経済を再出発させ、伝統的な政治構造を復活させることに目標をおいた<sup>57)</sup>。しかし、社会的・経済的・政治的に安定せず、クーデターがたびたび起き、政局は安定しなかった。アキノ政権はこれら重要課題をうまく解決できなかったのである。フィリピンは世界で最も、富の分配が非平等な国の一つであった<sup>58)</sup>。1992年、フィデル・ラモス<sup>59)</sup>が大統領に就任した。彼の課題は公共事業を拡大し、財政の紐を緩めて経済呼び水効果を引き起こすことによって新しい借款の確約を取り付けることであった。そのためにはIMF<sup>60)</sup>が勧告した緊縮財政政策とのバランスをとることであり、それを彼はやってのけた<sup>61)</sup>。1998年にはホセ・エヘルシト・エストラダ<sup>62)</sup>が大統領になった。法律違反や暴力は長いことフィリピン文化を特徴づけるものであった<sup>63)</sup>。現在はグロリア・マカパガル・アロヨ<sup>64)</sup>大統領の時代である。

スタインバーグは著作の中でフィリピンの苦境の原因を「致命的とも言える頭脳流出、安全保障

面でのアメリカへの依存、莫大な富を持つにも関わらず、真の国家建設のために必要不可欠な規律を拒否するオリガーキー（特権的政治家層のこと）、地域全体の利益よりも自分や家族の利益を優先させる伝統が文化に深く根付いた」<sup>65)</sup>ことが、市民権の意味をあいまいにさせ、脱税や汚職を承認してしまっていると結論づけている。

スタインバーグが言及する頭脳流出の中に看護専門職者の海外移住も含まれていると考えられる。フィリピンは現在、約7,500万人の国民が生活している。この敬虔なカトリック国家は人口成長の歯止めができないままに人口が増え続けている。衛生設備やごみ処理の問題のほか生活習慣に依拠する先進国同様の疾病を含め、行政的には十分でなく国民の健康問題は深刻であると考ええる。加えてレイニンガーが著作『レイニンガー看護論—文化ケアの多様性と普遍性』<sup>66)</sup>の中で示したがごとく、フィリピン人の価値観や行動様式はその国独特のものであり、それは歴史の中で微細な変化を伴って進行する。突然の変化はその国独特の文化に衝撃を与えるものであり、混乱を深めるといことも視野に入れる必要がある。

## ■ フィリピンにおける看護専門職者養成のはじまり

フィリピンにおける本格的な看護専門職者養成はアメリカが支配を始めた時代に一致する。1898年には米西戦争が起き、フィリピンは自国の独立を目指してアメリカに協力して戦った。宣戦布告からわずか1ヶ月でスペインに勝利したアメリカは、スペインが去ったあとのフィリピンに10,000人以上の地上部隊を送り込んだ。チョイは著作で、フィリピンにおけるアメリカ軍の突然の侵略についてミネソタのフィリピン研究グループは、抑圧された民族、すなわち、スペインの専制的な支配下で苦しんでいるフィリピン群島をスペインから解放するために戦ったと述べ、他のフィリピンのアメリカの組織とフィリピン研究グループは、米西戦争はスペインを破るために戦われたのであり、フィリピン人を自由にするためではなかったと論じている<sup>67)</sup>。その証拠として同研究グループは、フィリピンはスペインがアメリカへ降伏した直後の1898年には完全な独立のためにアメリカと戦ったのではないかと主張しているという。

20世紀の変わり目のフィリピンのアメリカ併合

前のスペイン植民地政府の教育制度は、不平等な性差に基づくものであった。フィリピン女兒に限られた数だけが若干の初等教育をスペインの慈善施設で受けた。フィリピンのスペイン系大学であるセント・トーマス大学は1879年に助産婦学校が創立されるまで高等教育から女性を排除した。助産はスペインの植民地支配の間のフィリピン女性に提供された唯一の領域であった。スペイン植民地政府の病院と他の医療機関では、主にスペインの修道士と修道女が病人を看護した<sup>68)</sup>。

1862年に、ヨーロッパの慈善修道女会の看護婦達は、サンファン・デ・ディオス病院で働くために到着した。サンファン・デ・ディオス病院は孤児、知的障害者あるいは精神異常者と貧乏人のためにカトリック修道女によって設立されたスペイン系の施設である<sup>69)</sup>。さらにスペインの外科医や実務家、あるいはセント・トーマス大学医学部を卒業したフィリピンの男性医師達は医学の専門家として診療にあたった。19世紀後期にスペイン植民地政府はエリートのフィリピン人男性がヨーロッパの大学、例えばバルセロナ大学やマドリッド中央大学などの教育を海外で受けることを推奨した。最も有名なモデルとして示されるのがフィリピンの国民的英雄であるホセ・リサルである。彼はマドリッド大学医学部と哲文学部で教育を受け、内科と眼科医であると同時に優れた言語学者であり、優れた教養を備えた文学者であった。

ドックは『看護の歴史』<sup>70)</sup>で主としてアメリカがフィリピンを植民地化した時代について「スペインとの戦いの間または直後に、軍サービスあるいは赤十字の仕事で島にきたアメリカの看護婦は全員で約125人であった。」<sup>71)</sup>と述べ、続いて「彼女らの仕事は特に看護を専門職業にしていくことは重要でなかった。なぜならば、彼女らは彼女らの義務が果たされると即座にほとんどが島を去ったからである。」<sup>72)</sup>と述べている。ドックによれば少数の赤十字看護婦は軍の仕事に加わったが、従軍看護婦部隊は段階的に減らされた。軍と従軍看護婦の仕事は、常に局在化されて、実際にアメリカ人にのみ適用され、フィリピン群島における国民の看護は市民政府サイドで雇用され、訓練を受けた。

フィリピン人の福祉に対してはアメリカ人の“慈善的アイデンティティ”に関係していた。それは1898年にマッキンリー大統領がアメリカ人を



“入植者または征服者”と見なさないで友人とみなすようにと述べた言葉に表れている<sup>73)</sup>。弱く、病気に罹りやすく人種的に劣っているフィリピン人は、アメリカの様に健康的で優れた人種に改善すべきだと彼らは考えた。フィリピンの再構築には、社会的にも科学的にもアメリカに依存する必要があったのだ。

サン・ラサロにはコレラ、痘瘡や他の感染症をケアする特殊部門があったが、ハンセン病、狂気、麻薬常用の犠牲者、その他の疾病に対する看護はフィリピンの看護助手が担当していた<sup>74)</sup>。ビリビッド病院はビリビッド刑務所と関係があつて、400ベッドの収容力を持つ新しい病院であつた。業務はアメリカの看護婦の指導下で現地の係員によって遂行された<sup>75)</sup>。クリオンのハンセン病コロニーは、世界で最も大きいものであり、約2,200人のハンセン病患者が入所していた。フィリピンにおけるハンセン病患者を一般から分離する計画の成功は、フィリピン群島の歴史上画期的な出来事であつた。その上、コロニーでは60ベッドの大きな現代的な病院が完備された。ハンセン病患者は一般的な疾病にも罹患する場合がある。従って医療従事者はハンセン病特有の症例に加えて脚気、痘瘡、赤痢や他の熱帯病を治療する必要があつた。医療は2人のアメリカ人医師と6人のフランス人修道女によって続けられていた。それは同時に布教のためのすばらしいフィールドであつた<sup>76)</sup>。

メアリー・ジョンソン病院は、メソジストのエピスカopal教会の小さな病院であり、ここでは特に出産の仕事と幼児の衛生問題について優れたケアがなされていた。フィリピン総合病院は旧赤十字と元従軍看護婦によって1902年に設立された。その収容能力は40ベッドから80ベッドに急速に増加した。そこでは18人の看護婦と10人から12人の看護士が働いていた<sup>77)</sup>。1910年に設立された新しい病院は1,000人の患者に対応できるように整備され、25人のアメリカの看護監督と約150人のフィリピン人看護婦と看護士が働いていた。フィリピンで看護婦を訓練するというプロジェクトは、エドワード C. カーター少佐（1903-1905の間、フィリピン群島の健康庁長官でありアメリカ軍外科医であつた）が1903年という早い時期に推奨したが、1907年にメアリー E. コールマン嬢（その女性の6年間学部長であつた）がフィリピンの師範学校の専門分校として看護婦学校を開設するまで実現しなかつた。女性を看護婦にむけて訓練すると

いう考えは、フィリピンの人々にとっては完全に異国の発想であつた<sup>78)</sup>。

1830年代と1850年代にアメリカはコレラに対して適切に対応し、根絶することができていた。1900年代初期のフィリピンにおけるコレラの発生は、アメリカ軍外科医に公衆衛生調査実施についての正当性を与えた。西洋の医学は、統計および研究所の調査を通して世界のあらゆる領域で機能していた<sup>79)</sup>。一部のフィリピン人は、コレラ検索と調査派遣団を指揮したアメリカ視察官を殺した。フィリピンのコレラ犠牲者は抗コレラ薬を飲むことに抵抗したので、薬を投与するときアメリカの医師が時々武力行使しなければならないほどであつた。さらに、コレラ流行の間、アメリカ人が病院に到着したコレラ犠牲者を毒殺したという噂はフィリピン人の間で広まった<sup>80)</sup>。アメリカの強制とフィリピン人の抵抗という暴力的な構図にも関わらず、フィリピン人の永続した病気の問題は、よりアメリカの医療行為の必要性を正当化した。ドックにとって乳児死亡率が44パーセント（完全死亡数の）という現実巡回看護婦のセツルメントのための広大な活動の場所が、まさにそこにあつたのである。フィリピンにおけるドックの国際的な展望は、アメリカの植民地政府の課題を補足するものであつた。つまり、フィリピン人の健康問題を基礎にフィリピンにおけるアメリカ植民地主義が正当化されたのである。

前述の仕事に加えて、3つの大きな健康に関する仕事健康局によって開始された。1つ目は乳児死亡率の減少、2つ目は十二指腸虫駆除、3つ目に遍在する結核に関する大キャンペーンである。他の国の場合のようにフィリピンでも心身に影響を与える災いが存在した。乳児死亡率の減少については主にフィリピンの医師と慈善家によって開始された。

ドックはナイチンゲールが示した“健康”と“病氣”の間には段階的な変化があることとその看護についての確証を得た<sup>81)</sup>。ナイチンゲールが看護教育を開始したのは1860年であるが、彼女の教育の試みは世界中に広まった。彼女の看護や看護教育に関する様々な提言は『ナイチンゲール著作集 I・II・III』<sup>82)</sup>に明らかに示されているが、特に公衆衛生に関することは『町や村での健康教育』<sup>83)</sup>に見ることができる。

ドックは、アメリカにおける看護の専門職化と専門看護の国際化の活動家であり、看護学の歴史

家であった。歴史に関する彼女の業績については『看護・医療の歴史』<sup>84)</sup>や『ICNの歴史』<sup>85)</sup>に詳しく述べられている。彼女自身イザベル・スチュワート<sup>86)</sup>と共同で『アメリカ看護史』を執筆しており、ナッティングと共著の『看護の歴史』全4巻は日本・フィリピンも含んだ世界の看護の歴史である。ドックは公衆衛生看護の第一人者であった。『ヘンリー・ストリートの家』<sup>87)</sup>でも示されたようにアメリカの公衆衛生も決してよいわけではなかった。彼女はニューヨークのヘンリー・ストリート・セツルメントをリリアン・ウォルド<sup>88)</sup>と一緒にいていた<sup>89)</sup>。女性の参政権問題と抑圧された階級に対して強い同情を持ち、反戦主義者でもあったドックは強い正義感と愛情を持っていた。加えて、ドックは1900年から1922までICN会議の初代幹事であった。1900年にはANJ (American Nursing Journal) の創立を支援し、1923年まで編集者の一人として活躍した。ドックは帝国主義の名においてアメリカ植民地下におけるフィリピン人の健康問題に対して人道的立場で積極的に支援した<sup>90)</sup>。

ドックの考えではフィリピンの人々が物理的に自立することは、それらの将来の効果と繁栄を保証することであった。それは、フィリピンにおける島全体の育英事業の基礎でなければならない。高い乳児死亡率を低下させ、フィリピン人の発展を遅延させている痘瘡、コレラ、結核、マラリア、十二指腸虫症、脚気他多くの感染症を根絶することは、相当な医学的基礎に基づくものであり、科学や工業教育を推進させるためにも不可欠である。当面は、できるだけ多くの個人衛生と公衆衛生についての知識を広げることが最も賢明であった。それは治療的であるというよりはむしろ予防的であった。フィリピン人の“身体を強固にする”ことは、西洋の医学知識の理論上、実現可能であり実際のであった。

ドックによれば、看護婦としての訓練を受けるための教育対象であった若いフィリピンの女性は、一般的なフィリピンの原始的習慣の結果としてではあるが、公衆衛生についての“基本の知識”の欠如で苦しんだとされる。フィリピン人看護婦の訓練はコレラ流行に対するアメリカの医療施設における訓練のように、階級と性に関するフィリピン人の社会的信条とその規範を改善するには強制的制御を必要とした。ドック自身が認めたように特に看護婦として働いているフィリピン女性に

対する概念は、一般のフィリピン人あるいはエリートのフィリピン人両方ともに完全に克服されなければならなかった。タオまたは農民階級の人々は無知と迷信と絶望が蔓延しており、ひどく貧しかった。彼らは60の異なる方言を話し、コミュニケーションがとりづらかった<sup>91)</sup>。ベッドとそれに必要なネンは不足していた。家族は食事を床の上でなし、鍋周辺に集まって、指で食べていた。食事は一般に米、魚、自然栽培の2、3の果物と野菜である。彼らは皮膚と性病が多く、結核、赤痢、マラリア、コレラ、痘瘡、脚気他の熱帯病を発症しやすかった。生水を飲むのは安全ではなく、飲む前にまず沸騰させる必要があった。しかし、極めて少ないフィリピン人のみがこの予防措置をとっていた<sup>92)</sup>。

看護学校開設後、新たに引き起こされた問題は看護学生が着用するユニフォームのことであった。フィリピン人は、約300年の間同じコスチュームを着用した。このドレスは、階級差異の永続性を意味していた。看護教育期間中は自国のコスチュームを廃止し、ストライプのギンガムユニフォームと白いキャップとエプロンの着用が義務づけられた。それらの着用は看護学生が最も魅力的に見える時であった。非番になると看護学生達は自国のコスチュームに戻るにも関わらず、看護学生であるということを非常に誇りに思うようになった。大多数のフィリピン人達はシンプルなサンダル履きであったが、彼女たちは足を保護する靴とストッキングを履いた<sup>93)</sup>。

学校の開設に伴い、政府から支給される10の奨学金と民間の個人による6つの奨学金併せて、16の奨学金が支給された。看護学生達は師範学校で1年間学んだ後、6人が看護実践のためにセントポール病院へ、3人は大学病院に、7人は市民病院に送られた。

最初、フィリピンの看護学生は臨床講義と実地で看護に関する学習をした。彼女らは医学、薬物学、マッサージと細菌学、感染症と手術室技術についての講義を聞いた。看護学一般、熱帯病の看護、健康局の衛生上の仕事、薬局についての一般教育他、英文法と英会話、フィリピン諸島の工業および生活状況が教育内容に含まれた。

基本のコースは、民族と気候の特別な条件に対処する融通性のある変形実施例で、2年半の間、教育内容が充実するよう計画された。6ヵ月の予備コースは調理室、洗濯室、材料室、その他で毎



日5時間から6時間30分の学習であった。その間に彼女たちを病院ルチンに慣れ親しませた。英語のレッスンは最も重要と考えられ毎日実施された。予備のコースが完了すると病棟における実践である。週の5日間は日勤期間であり、1年目は6時間半の日々の病棟業務を行った。最終学年は、8時間の病棟業務に当たり、毎週1つの講義が為された。看護学生は訓練の間、実際的な病棟看護のあらゆる分野を経験した。高校卒業者または優れた教育的な利点を有した看護学生たちは優先された。

最後に衛生査察と名づけられたコースは、特に男性看護師のために計画された。6ヵ月の研究科は上級コースであり、特定の能力を有している卒業生が選択された。そして、それらの研究科の学習期間、彼らは最低生活に必要な食料と洗濯つきで1ヵ月につき30ペソが支払われた<sup>94)</sup>。チョイはドックを引用しながら、「男子病棟の男性患者は看護師によって看護を受け、看護婦は事務業務（病歴記録）だけをした、そして、治療に関わる薬剤を配る仕事は通常の訓練よりさらに短期間で養成された者によってなされた」<sup>95)</sup>と述べ、フィリピンの若い女性を教育・訓練することは「個人衛生と公衆衛生のまさしくそのA-B-Cに基づいていなければならなかった」<sup>96)</sup>というドックの主張を力説した。1915年までに、フィリピン総合病院看護学部のカリキュラムは一般の看護、解剖学、生理学、薬学と薬草学、細菌学、臨床検査、産科、小児科、手術、内科学、眼科、耳鼻咽喉科、衛生の13教科目であった。一般の看護法としては例えばマッサージ、看護管理、看護倫理及び看護の歴史が含まれた。卒業後コースとして特別な助産コースがあった<sup>97)</sup>。

聖ルカ病院看護学部の教授団は、1910年代から1940年代を通してアメリカにおける看護専門職志向に即し、フィリピン看護婦の教育に密接に関係があった。1911年に、聖ルカ病院看護学部の最初の卒業生、キンタナ・ベレイ、ベネランダ・スリット、カリダッド・ゴコの3人は、イングランド前アメリカ大使の妻から財政援助を受け、フィラデルフィアのプロテスタント病院で、大学卒業後の学習課題を完了した<sup>98)</sup>。ロックフェラー財団は1922年に、コロンビア大学のティーチャーズカレッジで研究するため渡米した聖ルカ病院看護学部の卒業生、エスコラスティカ・アガテップを支援した。アガテップは、聖ルカ病院看護学部

の最初の看護技術講師としてフィリピンに戻った<sup>99)</sup>。

1939年に、アメリカ愛国婦人会はイメルダ・ティナビンに奨学金を提供した。彼女はコロンビア大学で看護教育学士を取得し、フィリピンへ帰国した。その後、1943年から1945年まで聖ルカ病院看護学部の主要なポストについた。これらの過程は、フィリピンで実質的に看護教育を実施している全ての看護学校と後の大学に影響を及ぼした。アメリカという海外での研究は、フィリピンの専門看護職にとって実践上、事実上の必要条件になった<sup>100)</sup>。

性差における教育上の社会的制約はアメリカにも存在した。フィリピンの男子学生は医学と法律が学べたのに、フィリピン女性のために最も普及している研究分野は家政学および社会的・宗教的な仕事と看護であった。フィリピンの一部の女子学生はそれらの研究を通して海外で今まで男子領域だけに解放されていた事業と神聖な政治の世界に入った<sup>101)</sup>。しかし、それは少数であった。

フィリピンにおける看護婦のキャップは、日本女性の“上品な着物”、インド女性の“不可解なベール”、中国女性の“纏足”という弾圧的なイメージと対照をなし、女性解放の象徴としてフィリピン女性の現代性の具体的な表明になった<sup>102)</sup>。チョイはフィリピン女性として初の哲学博士号を得たエンカーネーション・アイズナの言葉を引用し、従来からフィリピン女性の活動の場所は決して制約を受けていなかったと主張している。さらに、ミンダナオのイスラム教徒を除いては、群島の南部では一夫一婦制であり、フィリピン人と他の東洋の民族を区別した。アイズナはフィリピン女性に教育的な機会を与えてくれたアメリカ植民地政府に感謝を表明したにも関わらず、この感謝は、アメリカ人がフィリピン女性の社会的評価を高めたことについてではなかった。というのは古代のフィリピン人は明らかに男性と女性の平等を知っていたと言及しているからである<sup>103)</sup>と述べている。

## ■ フィリピンにおける専門看護教育と交換看護プログラム (EVP)

先述したようにアメリカ植民地支配下のフィリピンの看護専門職としての発達は、アメリカの看護婦達が母国で進行させていた看護専門職として



進行中のプロセスと足並みをそろえていた。フィリピンの看護婦たちが海外で働く機会を与えるという新しい形式の導入は、アメリカ植民地支配の始まりから密接に連結された<sup>104)</sup>。チョイはフィリピンの看護婦がアメリカで働くための下地、すなわち、専門職の頭脳流出の形式を可能にした重要な前提条件がアメリカ植民地体制下で整えられ、現代におけるフィリピン看護婦の国際的移動を可能にした<sup>105)</sup>と考えた。

アメリカの看護リーダー達は、ヴィクトリア女王治世下のイギリスで、フローレンス・ナイチンゲールが実施した教育方式に倣った教育方法を1873年に導入した。彼女達はアメリカで中流—上流の女性の長所と特性を持つ若い“上流婦人”のための適切な仕事として看護を専門職として改善することを目的とした。1900年代初期のフィリピンの看護学校は、若い女性を立派なフィリピンの家族から選ぶことによってアメリカの看護改革方式に続くものであった。セントポール病院、フィリピン総合病院と聖ルカ病院は看護学生募集に際し「心身ともに健康で、倫理的な行動が取れて、社会的にも良い地位を持つ家族で、地域社会でよく知られている3人から推薦が得られる人物」<sup>106)</sup>を入学資格とした。

1920年代及び1930年代に、フィリピンの看護学校は、アメリカの専門看護職（例えば高い入学基準、保健婦事業の専門化と看護組織の形成）の傾向を示した。アメリカではアメリカにおける看護の専門職化の歴史と平行して教育的な標準を示すことに関心が集まっていた<sup>107)</sup>。アメリカの場合のように、フィリピンの保健婦事業は、ますます特殊化された。1922年に、フィリピン大学、フィリピン総合病院、公共福祉委員会、アメリカ赤十字社のフィリピン支部や他の慈善組織と協力したフィリピンの健康局は、フィリピンの看護婦を保健婦事業に向けて訓練する最初のコースを確立した。1938年までに、フィリピンにはフィリピン大学の公衆衛生看護学校の最初の学士を生んだ<sup>108)</sup>。この初の卒業生は、彼らの専門看護職志向への発展を可能にした。

1922年に、アナスターシャ・ギロン・ツーパスと150人のフィリピンの正規看護婦は、フィリピン看護協会（Filipino Nursing Association 以降 FNA）を組織した。FNA を通して、フィリピンの看護婦は標準的な教育の基準を規定、保健婦領域における実践と訓練方法を開発した<sup>109)</sup>。その

全体の目的は看護職の水準を他の職業と同レベルに高めることにあった。FNA は看護教育連盟をつくり、看護教育カリキュラムの基準を発表して、フィリピン看護学校への入学必要条件を引き上げ、看護学士号プログラムを提示した。FNA の最初の決議は、フィリピン大学における看護大学の設置申請であった。その他、FNA は乳児死亡率の減少、フィリピン諸島の予防できる疾患の抑制を他の組織と協同する事、フィリピンの保健婦事業を推進する事を目的とした<sup>110)</sup>。これらの活動は FNA が国際看護婦協会（International Council of Nurses, 以降 ICN）への加入資格の条件を整えさせた。FNA は1929年に ICN に加入した<sup>111)</sup>。因みにアメリカ看護協会（American Nursing Association 以降 ANA）は1911年に設立され<sup>112)</sup>、日本看護協会（Japan Nursing Association）の設立は1929年、日本看護協会が ICN へ初参加したのは1933年である。

ICN は英国の看護リーダーであったフェンフィック<sup>113)</sup>とアメリカのドックらの提唱によって1899年に設立された。1900年に最初の規約が創案された。マッキンリー大統領が暗殺され、アメリカに衝撃が走った1901年、第一回会議が開催された。ICN の目的は看護教育を標準化して専門職の倫理とそのメンバーの公共の有用性を認めさせるためにその基準を上げることであった。1900年に採用された ICN 規約の前文では「全世界の国々から参集した我ら看護婦は、看護専門職の最高の福祉は、思想、共感、目的のより大きな結合によって増進せられることを真摯に確信し、病者の効果的看護を助長し、看護職の名誉と利益を確保するためにここに団結して労働者の連合体を組織するものである。」<sup>114)</sup>と述べられ、彼らの主要目的は ICN 協会規約第一条で述べられたように「全世界の国々の看護婦間のコミュニケーション手段を提供し、国際親善の交換のための便宜を図ること、そして、「世界の全地域の看護婦のために、患者と看護職の福祉に関連した問題について協議するために、共に参集する機会を提供する」<sup>115)</sup>ためであった。ICN は1910年代と1920年代に専門看護教育のための基準を定義した。それによれば「訓練看護婦は、訓練を受けている期間中に少なくとも内科、外科、小児科を含む4つの主要な看護部門において指導と実習を受け、かつ卒業と同時に、看護の一般的実務に入り、派出看護、病院看護、訪問看護を含む看護の全ての主要領域に働

く看護婦に共通の基本的義務と責任を果たす準備のできている看護婦を意味する者である」<sup>116)</sup>とした。その上、専門的な看護教育職の指導下で最低3年間訓練を継続することと看護婦の定義を明確にするといった条件つきで各国の看護協会の加入を認めた。従って、ICNへ加入する国々は訓練のための看護教育プログラムを構築する必要があった。1929年のICNへの入会期限までにFNAはこれらの基準を満たした。しかしながら、第二次世界大戦と1942年の日本軍のフィリピン占領下における日本体制は、看護教育訓練の場を限局させ、日本語を学ぶことを強要し<sup>117)</sup>、マニラの看護教育と病院での教育実践を中断させた。

フィリピンの看護婦は、看護を学士号程度に普遍化させるといったアメリカの専門看護職傾向を示した。アメリカでは、看護の学士号を付与できる4年制の教育プログラムを有する看護大学が1920年代に出現したにも関わらず、1940年代後期まで発展しなかった。しかし1946年から1948年までの間にフィリピンでは、看護系教育機関として9つの大学と単科大学があった。1940年代後期に、アメリカの慈善組織は、留学するフィリピンの看護卒業生を後援し続けた。1948年にプリタ・アスペリラは中国 Medical 委員会（ロックフェラー財団の子会社）から資金提供を受けている西洋の大学から、看護学修士号を得た。彼女は、フィリピンに帰国して、東部のラモン・マグサイサイ・メモリアル医療センター大学内に看護大学を編成した<sup>118)</sup>。1940年代後期に、アメリカに旅立ったフィリピンの看護婦はわずかであった。学士号プログラムを有する看護大学の卒業証書を有していた大多数のフィリピンの看護婦にとってアメリカに行くことは単に夢であった。しかしながら、1948年にアメリカ政府はフィリピン政府との間に交換看護婦プログラム（Exchange Visitor Program 略してEVP）を確立した。ところが、アメリカの看護婦とフィリピンの看護婦間には専門的な団結の欠如があった。海外に残りたいと希望するフィリピンの一部の交換看護婦は搾取的な病院雇用者と直接的に提携した<sup>119)</sup>。

「あなたのキャップは、パスポートである」<sup>120)</sup>というキャッチフレーズは、フィリピンで教育を受けた看護婦達を活気づけた。アメリカに向けてフィリピンの交換看護婦の大規模な移動はあったが、それが直接的な目的ではない。チョイはアメリカの冷戦課題と第二次世界大戦後の労働不足が

歴史的に重要であったにも関わらず、その目的は、世界がアメリカに対してより良い理解を示すために実施された<sup>121)</sup>と述べている。しかしながら、一旦フィリピンの看護婦とフィリピン政府が能動的にEVPに関与するようになったら、フィリピン政府はプログラムへの参加を支配し始めた。EVPは、フィリピン看護婦の海外への大規模な移動の最初の波を促進した。1956年から1969年の間に1万1,000人以上のフィリピンの看護婦がプログラムに参加した<sup>122)</sup>。それは給与が大いに関係していた。1971年当時のアメリカの1ドルはフィリピンの6.25ペソに等しかった。ニューヨーク病院で看護婦次長として働いていたフィリピン看護婦は、この為替相場によって毎年最低60,000ペソをかせいだ。フィリピンでは、フィリピンの看護婦の年俸はおおよそ4,200ペソであった。換言すれば、アメリカで働く看護婦の1年分は、フィリピンで働いているフィリピン人看護婦の12年分であった<sup>123)</sup>。さらに、ANAは交換看護婦の低い固定給はアメリカの看護婦の経済的地位を下げたと考え、EVPの濫用を批判した。というのは交換看護婦にはアメリカにおける国家登録看護婦の資格が与えられなかったからである。彼女らは、アメリカでの交換看護婦の看護実践は患者の安全を危うくすると主張した<sup>124)</sup>。逆にEVPは予想外の結果も生んだ。というのは交換看護婦がフィリピンに帰国し、アメリカでの看護の業績を公表することによってアメリカ人看護婦の満足度を高めた<sup>125)</sup>からである。しかしながら、アメリカにおける看護が優位であると信じる交換看護婦は、フィリピン国内の看護が極めて低いという信念を多くもった。

フィリピンにおける看護婦のキャップは、世界の多くの地域、例えばヨーロッパ、アジア、中東、北アメリカへの確実な道であった。1960年代にオランダ、ドイツ、オランダ、ブルネイ、ラオス、トルコとイランの病院は、看護不足を解消するためにフィリピン人看護婦を受け入れた。諸外国で働くフィリピン人看護婦が異なる言語、種類の食物と新しい若干の看護技術に適応しなければならなかったにも関わらず、フィリピンの看護リーダー達はフィリピンにおける看護教育は諸外国で通用するものであると述べた<sup>126)</sup>。

1970年代初期に、マルコス政権はフィリピンの看護婦と他の労働者達が主体的に海外で働く事を推進した。海外で働いているフィリピンの看護婦



は、フィリピンがまさに必要とした外貨の送金を通して新しい国民的英雄になった<sup>127)</sup>。1966年から1970年の間に17,134人のフィリピンの専門家がアメリカに移住した。同年間4,300人以上のフィリピンのエンジニアと科学者がアメリカに移住した。INS (Information Network System) 統計によれば、3,222人のフィリピンの看護婦と2,813人の医師が移住した<sup>128)</sup>。1960年代初期、フィリピンでは大学・専門学校を含め看護婦の需要が供給量を上回ったので、フィリピンの企業家は地方や市街区域に看護学校を開設した。1950年から1970年の間に、フィリピンの看護学校数は、17から140まで上昇した<sup>129)</sup>。さらに、同国は1966年に看護学校の設置基準を緩和した。看護学校所有者が教育で莫大な利益を得たので看護学校の増加は1970年代中頃を通して続いた。

因みに呉大学が協定を結んだパーペチュアル・ヘルプ大学は、フィリピンでも富裕層が経営する有数の私学であり、学生数は全体で約50,000人、学部は法学部、医学部、薬学部、経済学部、情報学部、看護学部他日本の大学が有している学部はほとんどといってよいほど付設されている。同大学はホセ・デ・グズマン・タマヨとジョセフィーナ・ラペラル・タマヨ医師夫妻によって1968年に開設された。最初、マニラ市内に看護教育機関としてパーペチュアル・ヘルプ短期大学とその付属病院が設立されたが、現在はフィリピン国内のビンヤン市内にラグナキャンパス (University of Perpetual Help, Binan, Laguna)、ラスピーニャスキャンパスと大学付属ホセ・G タマヨ医療センター (University of Perpetual Help, Las Pines, Jose. G. Tamayo Medical Center)、他8キャンパス内に大学及び病院施設を有する巨大高等教育機関である<sup>130)</sup>。同大学は現在、創始者の意図を汲んだ直系家族によって運営がなされ、敬虔なクリスチャンとして人道主義的な教育を実践し、この膨大な教育施設で多くの専門職を養成している。

1973年に、マルコス大統領は、開業免許を得る条件として4ヵ月農村地帯で働くことを看護婦卒業生に要求する大統領令を出した。この目的は、フィリピン国内の看護婦不足を解消することであった。マルコスとPNA (Philippine Nursing Association)<sup>131)</sup> 会長はフィリピンにおける患者対看護婦比率を比較することによって、義務的な公共医療必要条件を正当化した。フィリピンの看護比率は10,000人に対し8人の看護婦、カナダで

は10,000人に対し57人の看護婦、西ドイツは10,000人対27人の看護婦、アメリカでは10,000人対49人の看護婦であった<sup>132)</sup>。多くの地方のフィリピン人が土地を持たず栄養失調と闘っている間、マルコス政権は農業商品の輸出を拡大した。官僚も看護婦を含む労働者の輸出を促進した。同時期、一般患者の看護をしているフィリピンの看護婦数の比率は実にひどかった。農業輸出から稼がれる収入の様に、海外で働くフィリピンの看護婦は、外貨を稼ぎ、フィリピンの国民経済を救済した<sup>133)</sup>。マルコスは海外で働くフィリピンの看護婦を励まし、彼女たちをフィリピンの新しい国民的英雄にしたのである。しかしながら、アメリカへ旅立ったフィリピンの一部の看護婦は、フィリピンに戻らず永久にアメリカに定着した<sup>134)</sup>。「アジアからの42,503人のプロの移民の、50%以上（それらのうちの26,690）は、フィリピンからであった。」<sup>135)</sup>と述べられたように、フィリピン政府は外貨獲得のために専門職として教育された誇り高い看護婦たちを世界に派遣したのである。わが国でも看護師不足が議論され、看護協会の反対があるにも関わらず、フィリピンからの安い労働賃金に頼ろうとする動きがある。

チョイは序文で「フィリピンにおけるアメリカの歴史と中国と日本でのアメリカの歴史的な経験の学究的不足によって苦しんだ。アジアの看護婦教育の歴史はアメリカの奨学金による安定した進歩にも関わらず、重要なギャップは残されている。」<sup>136)</sup>と述べている。

看護教育について言えば、同国の看護教育は植民地政策の中でアメリカ看護師の専門職志向が反映され、発展したが、その植民地政策の延長線上にフィリピン看護師の国際的移動があった。それはアメリカ他世界の慢性的看護婦不足が原因であり、その解消が主な施策であった。がしかしその背景にはアメリカの植民地化政策と諸外国への理解を求めるための施策であったのかもしれない。フィリピンの看護婦たちが海外で働くという現象はアメリカ政府とフィリピン政府のEVP協約によってなされたが、それは両国の目的において相違はあったが利害は一致していたと考えられる。EVP協約でアメリカに渡った看護婦たちの移住は経済的・文化的問題も有していたと考えられるが、それは専門職としての自己実現でもあったろう。

この問題についてアメリカが抱えている問題か



ら学ぶとすれば、搾取的な病院経営者（というより日本では経営困難な病院とするべきではないかと考えるが）がJNAの意向を無視して直接的に彼女らと提携することによって患者への公平な質的サービスが行えなくなる前に、JNAとPNAの連携が不可欠であると考え。同じ専門職として実践面での優劣を付けないためにも、彼女らが日本の国家試験に合格するべく道と支援体制を作ることであり、日本で正規に働けるフィリピン看護婦の育成を行うべきだと考える。

## ■ おわりに

パーペチュアル・ヘルプ大学との協定を契機にフィリピンに興味を持ち、その看護の歴史について検証した。東洋の仲間であるフィリピンとわが国との旧い関係性についてについて新たな発見をし、限りなく不明であった看護教育の歴史についても少しく理解が得られた思いである。スペイン植民地としての永い年限、アメリカの植民地、そして日本軍の侵攻と苦しい年月を過ごしたフィリピンは独立して間がなく、世界一貧しい国と評される。しかし、貧しさとは何かという問いに対する答えはマザー・テレサが著作で述べたがごとく心の貧しさの問題に行き着く。貧困の問題は大きい、豊かさが逆に精神的貧弱さを助長させる事もある。同国に対する真の理解はそこに住み、そこで問題を分かち合うことによって様々なことを

より知りえることができるのであろう。ナイチンゲールやドックが実践したがごとく貧しさの中に入り込み、その不潔から派生する病気に根本から立ち向かう勇気が求められる。

近年、日本における看護の歴史研究も活発に行われている。筆者自身ナイチンゲール研究ほか看護の歴史研究過程で戦争と看護の発展には様々な側面で切り離せない側面も有していたと考えているが、看護職者自らが直接的に国の政策を含めた歴史問題に介入することには躊躇する気持ちを禁じえず、チョイが煩悶するがごとく未解決のままである。しかし、その問題は本論の意とするところではなく、本研究は少ないフィリピンでの滞在期間中に触れ合った人々と肌で感じた文化と公衆衛生、看護との関連について興味を抱いて実施したものである。文献も少なく、歴史検証も浅い段階での報告であるが、少なからず私自身の中には限りなく深い闇の世界に光があたった感を抱いている。ゆえに検証が十分とはいえず、成果としては途中報告である。今後、研究の継続と歴史の積み重ねの中で更に明らかになったり、修正されたりする部分もあろう。

尚、日本では看護婦が看護師になって久しいが、フィリピン国における適用が不明であったために、本論ではフィリピンについて論じるときは看護師と看護婦に統一、文中・・・傍点筆者、注釈の人名については『岩波ケンブリッジ世界人名事典』より出典した。

## 注

- 1) マザー・テレサ (Mother Teresa 1910-1997年)；マケドニア生まれ。アイルランドのロレット修道女会に入会後、インドに派遣される。1948年にロレット修道女会を脱会、スラム街学校開設認可を受ける。1950年、「神の愛の宣教教会」をローマ教皇庁から承認される。1979年、ノーベル平和賞受。
- 2) ジャヤ・チャリハ、エドワード・レ・ジョリー編、いなますみかこ訳；マザー・テレサ日々のことば、p224、女子パウロ会、1996年。
- 3) 青山和佳著；貧困の民族史、東京大学出版会、2006年。
- 4) デイベット・J・スタインバーグ著、堀芳江他訳；フィリピンの歴史・文化・社会、明石書店、2000年。
- 5) 川中豪編；ポスト・エドサ期のフィリピン、アジア経済研究所、2005年。
- 6) メアリー・アデレード・ナッティング (Mary Adelaide Nutting 1858-1948)；カナダのケベック出身。イザベル・ハンプトン・ロブ (Isabel Hompton Robb 1860-1910看護教育の体系化に尽力したアメリカの看護教育者) の監督するジョンズ・ホプキンス看護学校の第一期生。ロブの後を受けて同校の校長となった後、コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジの病院管理コースの家庭管理（後に看護師教育）の教授になった。
- 7) ラビニア・ロイド・ドック (Lavinia Loyd Dock 1858-1956)；ニューヨーク、ヘンリー・ストリー

- ト・セツツルメントの看護婦であり、女性の社会的地位の向上に貢献し、社会福祉運動を展開した看護史上偉大な人物として評されている。
- 8) Mary Adelaide Nutting & Lavinia L. Dock (1907); A History of Nursing 1・2・3・4, Thoemmes Press, 2000.
  - 9) Catherine Ceniza Choy, Empire of Care-Nursing and Migration in Filipino American History, Duke University Press, 2003.
  - 10) マデリン M. レイニンガー (Madeleine M. Leininger); 看護現象を文化的・民俗学的視点からとらえたアメリカの看護理論家。看護学大学院を修了して文化及び社会人類学の学術博士号を取得した最初の看護師であり、1954年にワシントン D・C アメリカ・カトリック大学から精神看護学の修士号を取得し、シンシナティ大学保健学部小児精神科看護学クリニカルシュベシヤリストの修士課程を設置、続けて精神看護学の修士課程を開設しその大学院に治療的精神科看護センターを創始、指導に当たった。
  - 11) 千田夏光著; 従軍看護婦, 日本看護協会出版会, 1975年。
  - 12) 山崎近衛著; 紅染めし草の色, 日本看護協会出版会, 1975年。
  - 13) 東城まき著; 忘れな草, 日本看護協会出版会, 1976年。
  - 14) 大嶽康子著; 病院船, 野戦病院, 1979年。
  - 15) 佐々木秀美著; 歴史に見るわが国の看護教育—その光と影—, 青山社, 2005年。
  - 16) 前掲書 3)
  - 17) フェルディナンド・マゼラン (Ferdinand Magellan 1480-1521); ポルトガル人。東インドやモロッコで従軍した後、スペインに仕えた。1519年、セビリアを起航、南アメリカの南端 (処女岬) を廻って大海に達し、1520年太平洋と名づけた。マゼランはフィリピン諸島で殺害されたが、1522年、船団はスペインへ帰還、初の世界一周を成し遂げた。
  - 18) ウィリアム・バースタイン著, 徳川家広訳; 豊かさの誕生—成長と発展の文明史, p301, 日本経済新聞出版社, 2007年。
  - 19) 前掲書18), p301
  - 20) フェリッペⅡ世 (Felipe II 1527-1598); スペインのバッドリード生まれ。カール5世とポルトガルのイザベルとの一人息子、スペイン国王 (1556-1598)、ポルトガル国王 (1580-1598)。
  - 21) 高山右近 (1552-1614年); 摂津高山生まれ。1573年摂津高槻城主になるが、信長変死後、山崎の戦いで功勞を成し、明石5万石を得た。キリスト教信者として高槻・京都・安土などで領民を改宗させ、小西行長他秀吉配下の大名をキリスト教に導いた。1587年、秀吉のバテレン追放令によって免職されたが、前田利家に庇護され、1万5千石を与えられた。1614年徳川家康の禁教令によってマニラに追放され、当地で死亡した。
  - 22) 加賀乙彦著; 高山右近, 講談社, 2003年。
  - 23) ディベット・J・スタインバーグ (David Joel Steinberg 1937- ); ニューヨーク生まれ。1957年にフィリピンを訪れ、同国に魅了されて、ハーバード大学の東アジア研究所に進学、フィリピン現代史を学び始めた。彼はフルブライト奨学生としてフィリピン大学に留学し、修士号を取得。その後、第二次世界大戦中のフィリピン人の対日協力問題で博士号を取得した。現代はアメリカロングアイランド大学の学長である。
  - 24) 前掲書 4), p103
  - 25) 7年戦争; プロイセンに協力をしたイギリスとオーストリア・ロシア・フランス・スウェーデン・スペイン (1762年から参戦) の間におきた戦争。開戦は1756年であり、終戦は1763年である。
  - 26) ホセ・リサル (1861-1896); フィリピンの偉大な指導者であり英雄。ルソン島ラグナ県生まれ。比較的中流の家庭であり中国系メスティーソの5代目。彼はマドリッド大学医学部と哲文学部で教育を受けた。内科と眼科医であると同時に優れた言語学者であり、優れた教養を備えた文学者であった。フィリピン国内外における自民族に対する偏見と蔑視に早くから気づき、タガログ語を愛し、国の将来を憂えた。リサルの受けた教育はその時代のモデルであったが、彼らは世界の情報を得、

植民地支配の息苦しい抑圧に敵意を感じていた。彼は誰からも愛されたがゆえに彼の思想は危険思想として当局の目に留まり、1896年処刑された。

- 27) 安井祐一著；ホセ・リサールの生涯，p40，芸林書房，2001年。
- 28) 前掲書27)，p41
- 29) 前掲書27)，p71
- 30) 米西戦争；1898年に引き起こされたアメリカとスペインの戦争。この結果，アメリカ合衆国はスペインの旧植民地に対する管理権を得た。
- 31) <http://www.premium-philippines.com/travelinfo/history>.
- 32) ウィリアム・マッキンリー (William McKinley 1843-1901)；政治家。アメリカの大統領 (1897-1901) オハイオ州生まれ。南北戦争に従軍，弁護士・下院議員・州知事を経て“マッキンリー法”に因む高い保護関税政策と結びついている。1898年の米西戦争では，キューバおよびフィリピンがスペインから独立する際に協力，両国を獲得。1901年不慮の死を遂げた。
- 33) エミリオ・アギナルド (Emilio Aguinaldo 1869-1964)；フィリピン国初代大統領。カビテ州生まれ。スペイン占領時代 KKK と呼ばれる秘密結社に加わり，軍事的才能を発揮して名声を得たが，香港に亡命する。1898年米西戦争の勃発を機にアメリカの軍艦でフィリピンに戻り，戦闘を開始する。1899年にアジアで最初といわれる共和国憲法を公布してフィリピン第一次共和国を樹立した。米比戦争が勃発し首都マロロスが陥落すると正規軍を解散してゲリラ戦を展開するが，1901年に逮捕され，アメリカの主権を認めた。
- 34) アルテミオ・リカルテ (Artemio Ricarte 1868-1945年)；ルソン島生まれ。1890年，セント・トーマス大学卒業後，民族主義教育に自身の身を捧げる覚悟をなし，小中学校の校長になった。スペインの暴政に対し，民族の怒りが高まり，独立の気運が広がった。1896年，スペインとの戦いで国軍総司令官になり，その役割を果たすが，スペインを破った後に豹変したアメリカに対してリカルテは，革命軍総司令官として二度目の独立戦争を開始した。
- 35) アーサー・マッカーサー (Arthur Macarthur 1845-1912)；1900-1901年間，フィリピンにおけるアメリカ軍総督。ダグラス・マッカーサーの父。
- 36) テオドール・ルーズベルト (Theodore Roosevelt 1858-1919)；1901-1909年までのアメリカ大統領。ハーヴァード大学卒業。1898年の米西戦争では荒馬騎兵隊と称する義勇隊を率いた。
- 37) マニエル・ケソン (Manuel Luis Quezon 1878-1944年)；ケソン州生まれ。セント・トーマス大学法学部在学中にアギナルドの革命軍に参加。1903年に卒業。司法試験に合格し，知事や国民議会議員，駐米議員などを務めた後，1935年に大統領に就任する。1937年に国語をタガログ語と認めたことから「フィリピン語の父」と呼ばれている。1942年に日本が侵攻してフィリピンを占領した後，アメリカに亡命した。強大な指導力を発揮して民主主義的政策を推し進めた。
- 38) セルヒオ・オスメニャ (Sergio Osmena 1878-1961年)；セブ島生まれ。セント・トーマス大学で法律を専攻，司法試験に合格した後，平和的手段で独立運動を推進，1906年に国民党の初代党首になり，国民議会議員となる。その後，彼のヘア・ホーズ・カッティング法 (10年後の独立承認) はケソンの反対によりフィリピン議会の承認が得られず，ケソンの持ち帰ったタイディングス・マクダフィー法と呼ばれる法案が承認され，副大統領に甘んじたがケソン死亡後に大統領に昇格した。
- 39) ダグラス・マッカーサー (Douglas Macarthur 1880-1964)；アメリカの軍人。日本の敗戦後，連合国最高司令官として来日，日本の非軍事化，民主化などの対日占領政策を遂行した。
- 40) 前掲書4)，p173
- 41) 前掲書4)，p175
- 42) ホセ・ラウエル (Jose Paciano Lauel 1891-1959)；バタンガス州の裕福な政治化の家に生まれ。フィリピン大学法学部を卒業，上院議員，最高裁判事，司法長官などを歴任する。第二次世界大戦では日本軍に協力1943年に第二次共和国大統領に選出された。日本の敗戦が濃厚になると山下康文大将の命令で日本に亡命するが，戦後，亡命先の奈良で逮捕された。1946年に帰国，1948年にロハス大統領の恩赦で自由の身になる。1953年にはマグサイサイ大統領の擁立に尽力，同政権を支えた。



- 43) 前掲書 4), p5
- 44) フェルディナンド・マルコス (Ferdinand Edralin Marcos 1917-1989) ; 政治家で1965-1986年の間フィリピンの大統領。弁護士となるための教育をフィリピン大学で受け、反共産主義の政治家としてはアメリカから多大な援助を受け、民衆に対する抑圧の強化、外国からの資金の流用、政治的な暗殺などを特徴とする。
- 45) 前掲書 4), p5
- 46) 前掲書 4), p6
- 47) イントラムロス ((Intramuros) ; スペインがフィリピン統治のために建てた旧城壁都市。城壁内にはロマネスク風建築物が多く建てられていたが、第二次世界大戦でほとんど破壊された。
- 48) マヌエル・ロハス (Manuel Roxasy 1892-1948) ; カプス州出身。1913年、イリピン大学法学部卒業後司法試験にトップで合格。フィリピン法科大学の教授、市議員、州知事などを経て、ラウエル政権下では日本の穀物調達を担当した。1946年、オスメニャと対立して国民党を離脱、自由党を結成、1946年の選挙で大統領に選出された。大統領就任後、戦犯であったラウエルに恩赦を与え自由の身にした。クラーク基地での演説中に心臓マヒで死亡し、任期を全うすることができなかった。
- 49) エルピディオ・キリノ (Elpidio Quirino 1890-1956) ; イロコス州生まれ。フィリピン大学法学部卒業、ケソンの秘書を勤めた後に、下院議員・上院議員を経て、1943年に独立使節団のメンバーとしてワシントンに赴き、コモンウェルス (独立準備政府) のための憲法を創案し、代表者会議にも参加している。ロハス政権で副大統領を務めた後、ロハス大統領死去に伴い、大統領に昇格した。
- 50) ラモン・マグサイサイ (Ramon Magsaysay 1907-1957) ; 鍛冶屋になる教師の息子として生まれる。フィリピン大学で機械技師を目指したが、1933年にはホセ・リサル大学商学部を卒業。CIA の協力を得なが、第二次世界大戦中ゲリラとして活躍、ダグラス・マッカーサーから軍政知事として任命され、土地なしの農民の再定住計画などで緊張緩和を図った。1946年自由党後任下院議員として政界に入り、キリノ政権下で国防長官に任命され、フク団の鎮圧を図って国民的英雄になった。
- 51) カルロス・ガルシア (Carlos Polestico Garcia 1896-1971) ; ボホール州出身。1923年にフィリピン大学法学部卒業。司法試験に合格した後、下院議員、州知事、上院議員を経てマグサイサイ大統領時代、副大統領に当選した。同大統領の不慮の死去により大統領に昇格した。
- 52) ディオスダド・マカパガル (Diosdado Macapagal 1910- ) ; 現アロヨ大統領の父親。パンパンガ州の農村のスラム街で生まれた。勤労学生としてフィリピン大学。フィリピン法科大学で学んだが、健康問題が生じ、一時学業を中断。その後、地元有力者の援助でセント・トーマス大学法学部を卒業。1936年に司法試験に合格した。戦後、下院議員、国連総会のフィリピン代表、副大統領を歴任。1961年に大統領に選出された。為替管理の規制緩和など自由化路線をとったが国内市場の保護が強化され、工業化が立ち遅れ経済は停滞した。また、在任中はベトナム戦争を背景とした大規模な学生運動が起きた。
- 53) 前掲書 4), p192
- 54) 前掲書 4), p193
- 55) ベニグノ・アキノ (Aquino Benigno 1932-1983) ; 父親はフィリピンの戦前の政治家であり、親日家であった。フィリピン大学卒業後、ジャーナリストとして東南アジアを旅行し、それらをまとめたりしていた。21歳でマリア・コラソンと結婚、財を得た。その後、地方の町長、副知事を経験し、35歳で上院議員となった。アキノを恐れたマルコス大統領は彼に殺人の罪を着せ、死刑判決を下したり、何年も監禁したりして人間扱いをしなかった。幽閉中に彼は繊細で意識が高く成熟した人間になった。アキノの妻、コラソンは彼を外国に逃亡させようと各方面に働きかけ、バイパス手術の必要性を説いた医師の診断によってアメリカ、ダラスで外科手術を受けた。その後、1983年にマニラに戻る決意をして帰国の途に着いたが、飛行機を降りて数秒で後頭部を打たれて死亡した。
- 56) コラソン・アキノ (Maria Corazon Aquino 1933年- ) ; タラック州の大地主で有力政治家の娘として生まれる。フィリピン第三次共和国 7 代大統領で初の女性大統領。1949年、ニューヨークのマウント・ビンセント大学文学部入学フランス語専攻、1955年ベニグノ・アキノと結婚。ベニグノ・

- アキノがマニラ空港で暗殺された後、1986年大統領に就任した。
- 57) 前掲書 4), p257
  - 58) 前掲書 4), p283
  - 59) フィデル・ラモス (Fidel Ramos 1928- ); 経歴的にはなぞが多いとされるが、ウエストポイントで教育を受け、軍隊で急激に力を付け、マルコスの戒厳令時代にはフィリピン警察の総司令官になった。アキノ政権時代には度重なるクーデターのときに常に彼女を守り続けた。父親は議員に選出され、共和国の外相にも選ばれている。ラモスの妹はパリで博士号を取り、上院議員であり、上院の外務委員長を務めている。
  - 60) IMF (International Monetary Fund); 国際通貨基金のこと。国際連合の専門機関で本部はワシントンにある。
  - 61) 前掲書 4), p324
  - 62) ホセ・エヘルシト・エストラダ (Joseph Estrada 1937- ); 中下層の 8 番目の子どもとして生まれた。彼は映画俳優としてレーガンのように二枚目を通じてフィリピンに名前を広めた。1969年に町長として政界入りを果たしたのを契機に上院議員、副大統領を歴任、1998年貧困層からの圧倒的支持を得て大統領に選出された。違法賭博の関与などの疑惑から史上初めての弾劾裁判が行われ、決定的証拠が提出される中大規模な退陣要求がなされ、2001年大統領府を去った。その後、逮捕・起訴された。
  - 63) 前掲書 4), p364
  - 64) グロリア・マカパガル・アロヨ (Gloria Macapagal Arroyo 1947- ); マニラ首都生まれ。マガパカル大統領の娘。1964年ジョージア大学に留学、クリントン前米大統領の同級生。アテネオ・デ・マニラ大学で経済学修士号、フィリピン大学で経済学博士号をとる。アサンプション大学及びアテネオ・デ・マニラ大学で教鞭をとり、フィリピン大学でも講師を務める。アキノ政権下で貿易産業省次官に就任後、上院議員を経て1998年には副大統領に選出され、貧困問題解決のための食料保障を最優先し、様々な農業政策を推進した。2001年、エストラダ大統領が失脚した後、大統領に昇格した。
  - 65) 前掲書 4), p366
  - 66) マデリン・M. レイニンガー著、稲岡文昭他訳; レイニンガー看護論—文化ケアの多様性と普遍性, p196, 医学書院, 2002年.
  - 67) 前掲書 9), p17
  - 68) 前掲書 9), p17
  - 69) Mary Adelaide Nutting & Lavinia L. Dock (1907); A History of Nursing 4, p311, Thoemmes Press, 2000.
  - 70) 前掲書69)
  - 71) 前掲書69), p308
  - 72) 前掲書69), p308
  - 73) 前掲書 9), p21
  - 74) 前掲書69), p308
  - 75) 前掲書69), p308
  - 76) 前掲書69), pp309-310
  - 77) 前掲書69), p313
  - 78) 前掲書69), p313
  - 79) 前掲書 9), p22
  - 80) 前掲書 9), p25
  - 81) 前掲書 9), p22
  - 82) Florence Nightingale, 湯植ます他訳; ナイチンゲール著作集第一・二・三巻, 現代社, 1985年。
  - 83) Florence Nightingale, 湯植ます他訳; ナイチンゲール著作集第二巻, 町や村での健康教育,

- pp157-183, 現代社, 1985.
- 84) Josephine A. Dolan (1973), *Nursing in Society*, (小野泰博他訳; 看護・医療の歴史, 誠信書房, 2001年。)
- 85) デイジー・カロリン・ブリッジズ著, 小林富美英他訳; ICN の歴史, 日本看護協会出版会, 1977年。
- 86) イザベル・スチュワート (Isabel Stewart); カナダ生まれ。ウニィベグ総合病院で看護婦の資格を得る。後にコロンビア大学教員養成大学に通い, 卒業後, ナッティングの助手となる。1923年准教授となった。ナッティング引退後, 彼女の後継者となった。
- 87) リリアン・ウォルド著, 阿部里美訳; ヘンリー・ストリートの家, 日本看護協会出版会, 2004年。
- 88) リリアン・ウォルド (Lillian Wald 1867-1940); マウントホリオーク・カレッジから法学博士を受けた看護婦。ヘンリー・ストリート・セツルメントの所長として人々の状況改善に努めたほか, 福祉政策他連邦の児童局の発足に尽力した。
- 89) 前掲書83), p413
- 90) 前掲書9), p22
- 91) 前掲書69), p318
- 92) 前掲書69), p320
- 93) 前掲書69), p314
- 94) 前掲書69), p314
- 95) 前掲書9), p26
- 96) 前掲書9), p27
- 97) 前掲書9), p43
- 98) 前掲書9), p33
- 99) 前掲書9), p33
- 100) 前掲書9), p33
- 101) 前掲書9), p33
- 102) 前掲書9), p36
- 103) 前掲書9), p36
- 104) 前掲書9), p20
- 105) 前掲書9), p41
- 106) 前掲書9), p43
- 107) 前掲書9), p49
- 108) 前掲書9), p52
- 109) 前掲書9), p52
- 110) 前掲書9), p53
- 111) 前掲書9), p54
- 112) 前掲書83), p340
- 113) ベットフォード・フェンウィック (Ethel Gordon Fenwick 1857-1947); イギリス, マンチェスターの王立病院の看護婦学校を卒業。1897年のギリシャ・トルコ戦争で陸軍病院を統括した。看護婦の国家登録問題でナイチンゲールと見解を異にしたが, 看護サービスの質的公平さという観点からアメリカの看護指導者と同一見解にいたり, 事業を推進した。
- 114) 前掲書84), p266
- 115) 前掲書84), p266
- 116) 前掲書84), p84
- 117) 前掲書9), p55
- 118) 前掲書9), p55
- 119) 前掲書9), p62
- 120) 前掲書9), p62



- 121) 前掲書 9), p64
- 122) 前掲書 9), p64
- 123) 前掲書 9), p70
- 124) 前掲書 9), p80
- 125) 前掲書 9), p87
- 126) 前掲書 9), p90
- 127) 前掲書 9), p96
- 128) 前掲書 9), p98
- 129) 前掲書 9), p111
- 130) Manila. Bulletin-The Nations Leading Newspaper, 2006, 3/28.
- 131) PNA；チョイの文中に FNA のことと説明されているがいつの時点で名称が変更になったか現時点では不明。恐らく、1968年にフィリピン看護リーダーたちが Association of Nursing Service Administrators of the Philippine (ANSAP) を設立のために活動しているので、この時期ではないかと考える。
- 132) 前掲書 9), p113
- 133) 前掲書 9), p115
- 134) 前掲書 9), p40
- 135) 前掲書 9), p117
- 136) 前掲書 9), p17